

# 大島 哲

## ホッケーは楽しいもんや



津沢ホッケースポーツ少年団の監督兼代表の大島哲さん。短大を卒業した10年ほど前に、小学生の時にホッケーを教えてもらった方に誘われ、子ども達に教えるようになった。現在35歳。

「子ども達がホッケーを選んでくれて、長く続けてほしいという気持ちで教えています。」  
「自分たちが小学生の頃は毎日練習でした。今は、週に2回です。」

昔は学校の先生が中心となり、協力し合いながら教えることができた。今はスポーツ少年団と学校は分かれている。そうなる、練習は、指導者側ができる時間のみとなった。

「子ども達にしたら、友達と集まったり、ホッケーをするのが楽しいはず。4月から練習回数を増やす予定です。」  
小矢部市は子ども達が少ないわりにスポーツ少年団の種類が多い。その中でホッケーを選び、少しでも長く続けてもらうために、いろんな工夫をしている。



「昔のように、ただ走るだけでなく、他のボールゲームや鬼ごっこなどを取り入れ、子ども達にホッケーは楽しいもんやということを感じてほしいと思っています。」

小矢部はホッケーの町。ホッケーを通じて小学校時代に学ぶこと、中学時代に学ぶこと、高校で学ぶこと。その役割は違う気がする。

「僕らの役割は、子ども達にホッケーに興味を持ってもらうこと。途中でホッケーから離れても、また戻ってきてくれるようになってほしい。」

練習は基本的にストローク。ボールを使って相手にパスし、ボールを運ぶ。

「自分がよく言っているのは、左側からのパスです。体を入れなければいけない。」

これが出来れば試合で展開する幅が広がる。  
「ホッケーを通じて、精神面が成長してほしい。自らあいさつが出来たり、ボールを拾ってもらって、ありがとうと言えたり、人の話を黙って聞くことができる人間に。」

親御さんの協力体制も忘れてはならない。子ども達のドリンクの準備や体育館の鍵当番など。

「練習にも顔を出していただくこともあります。子ども達は親に頑張っているところを見てもらえるのが嬉しいようです。」

ホッケーも大切だが、津沢の町にも目を向ける必要がある。昔のような商店街はなく、年々人口も減っている。  
大島さんの住んでいる菟輪地区では、夜高行灯の保存会を立ち上げようと動き始めている。

「祭り当日の引き手はいるんだけど、行灯の作り手が集ま

らず、竹細工に時間がかかるんです。」

行灯の数は変わらないが、人口だけが減ってきている。だからといって、単純に行灯の数を減らせばいいという問題ではない。

スポーツ少年団のホッケーに関しても、人口の減少や仕組みの変化が起きたが、石動高校やレッドオックスの活躍を見る限り、うまく機能している。

指導者の若返りや柔軟な対応、役割分担など。ここに地域の文化やお祭りを守る沢山のヒントが隠れているように思う。

### ■大島 哲

昭和52年10月19日生。

「教え子の中から、オリンピック選手が出てきてほしい。」

仕事は、いざば農業協同組合東部支店の営業指導員。若い人の就職に力を入れている。

「農業を始めた人は、けっこういます。はとむぎを使ったお酒ができればいいなと思っています。」